

(4) 生物

1) 魚類

大阪市内の河川は、大部分が海水と淡水の混じる汽水域となっています。平成18年度に実施した市内河川における魚類生息状況調査結果では、コイ、ハスなどの純淡水魚が15種、ウナギ、アユなどの回遊魚*が6種、ボラ、スズキなどの汽水・海水魚が18種確認されています。

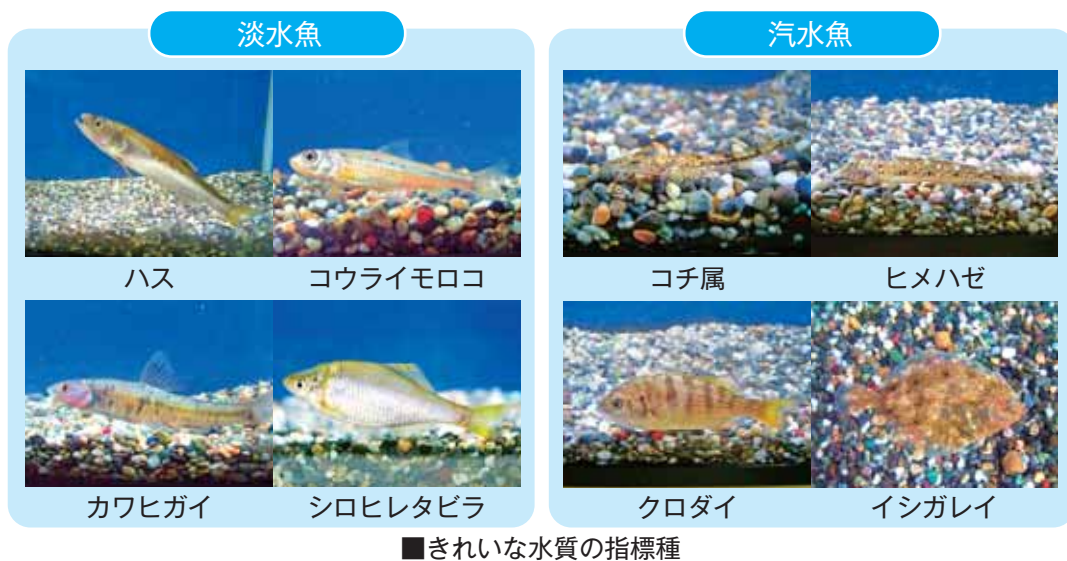
本市では、きれいな水質でないと生息できない種として、淡水域ではハス、コウライモロコ、カワヒガイ、シロヒレタビラを、汽水域ではコチ属、ヒメハゼ、クロダイ、イシガレイの計8種を「きれいな水質の指標種」に指定しています。

淀川下流、大和川、神崎川上流は、岸際に浅瀬があるなどの理由から魚種の数が多く、ハスやコウライモロコなど、きれいな水質の指標種が確認されていることから、水質が比較的良いといえます。

一方、市街地の河川は、魚種が少なくボラやフナなど汚濁に強い魚種が多くなっており、多様な生物が生息できる環境とはいえません。

近年では、市街地の河川の水質は改善されてきており、道頓堀川でもきれいな水質の指標種であるコウライモロコの生息も確認されています。

淀川のワンドには天然記念物のイタセンパラが生息していますが、近年は絶滅が危惧されています。また、在来種に影響を与えるオオクチバス、ブルーギルなどの肉食性の外来種*が多く確認されています。



■大阪市内河川に生息する魚類の一部

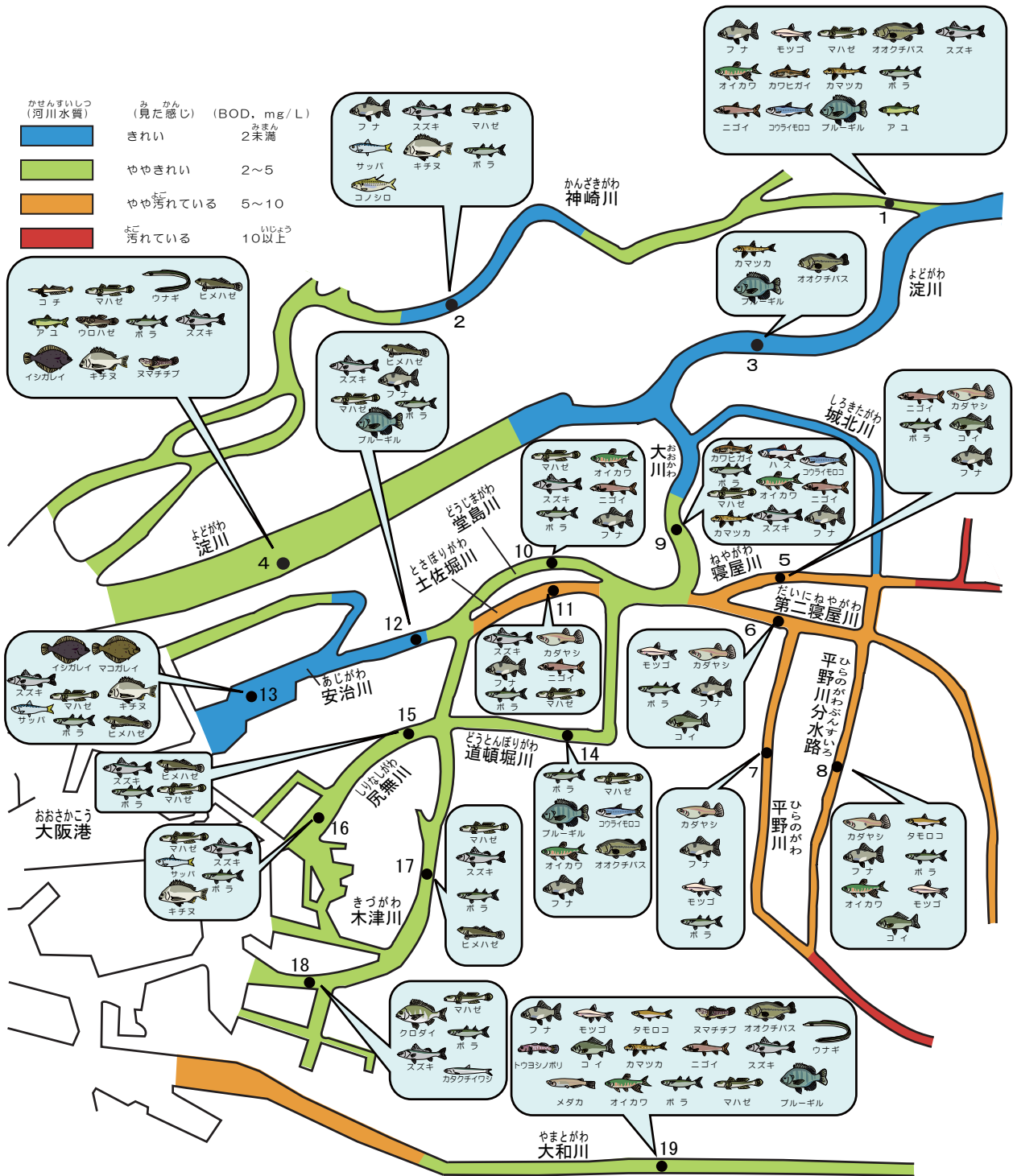
出典：大阪市内河川魚類生息状況調査報告書（平成19年3月）

*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。

第2章

大阪市の水環境の現状と課題

第1節 水環境の現状と課題



■市内河川の魚類の分布 (平成18年度)

出典：大阪市内河川魚類生息状況調査報告書 (平成19年3月)

2) 植生

大阪市内の河川では、自然の植生*は少なくなっていますが、淀川、大和川の河川敷では、ヨシの群生、ツル植物そしてヤナギ類などの自然の植生が都市空間の中にも残されています。自然の植生の復元が困難な市内河川では、大川に沿った桜並木など水辺の公園における樹木の植栽や護岸をツタなどで覆う護岸緑化などにより、水辺の緑化を行っています。



■ヨシ



■ボタンウキクサ

出典：大阪市立自然史博物館ホームページ

魚類と同様、植物においても外来種*の影響が問題となっています。外来種であるボタンウキクサは異常繁殖すると、水中に光や溶け込んでいる酸素量が不足し、また枯れたボタンウキクサが水底に堆積しヘドロ化するなど、水生生物に悪影響を及ぼします。淀川では、このボタンウキクサが大繁殖することがあります。

3) 昆虫

植生の少ない大阪市内河川では、昆虫はあまり見られませんが、自然の植生が残されている淀川や大和川では、トンボ類、チョウ類、コオロギ類そしてバッタ類などの多様な昆虫が見られます。また、環境省による「残したい日本の音風景100選」には、「淀川河川敷のマツムシ」が選定されています。



■コフキトンボ



■ハラオカメコオロギ

出典：大阪市立自然史博物館ホームページ

4) 底生生物

大阪市内の河川はコンクリート護岸で囲まれており、底生生物*が生息しにくい環境となっていますが、淀川や大和川では多くの底生生物が生息しています。

淀川の城北地区では、流れが緩やかなところや植物が生えているところで、ヒメタニシやミナミヌマエビが多く確認されており、河口付近ではゴカイ類、貝類やフジツボ類、カニ類などが多く見られています。

大和川では、水質の悪いところにも生息するカゲロウ属、川底が細かい砂泥から泥底の流れの緩い場所にすむユスリカ科の昆虫類、ミズミズ科などのミズズ類が多く見られています。



■ヤマトシジミ



■ドロフジツボ



■クロベンケイガニ

出典：大阪市立自然史博物館ホームページ

*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。